

父との
再会

大阪府堺市・多田 正俊

ニューデンバーというブリティッシュ・コロンビア州の町は、バンクーバーからほぼ七百五十キロメートル内陸部に入ったところにある。カスケード山脈を越えてなお進み、もう少し足をのばせばロッキー山脈が望める谷あいの町である。四方を夏でも頂に雪をかぶった山系に囲まれ、神秘感の漂う湖に面している。自然に恵まれた避暑地といった感じの町である。

この町を車で訪れたときは、夜半であったが、月明かりの中で、最初に目についたのはほかでもない日本の神社の鳥居であった。湖のほとりのわずか二十平方メートルほどの一角にしつらえたその鳥居は、おもちゃのように小さかったが、全体に真っ赤なペンキが塗られ、なぜか私の心をとらえた。日本から約八千五百キロメートルも離れた知らない町で、まるで場違いのようにたたずむその鳥居には、日系人の魂が凝縮されているように、ひどく物悲しくさえあった。

ニューデンバーに日系人が住むようになったのは、太平洋戦争中、太平洋岸に住んでいた日系人のうち約千五百人がここに移動させられ、バラック建ての家屋に隔離収容されていたことである。

戦後、カナダ政府から土地と建て物を譲渡され、現在でも、約六十人がひっそりと、しかも幸せそうに余生を送っている。戦争中、収容された土地にいまも日系人がそのまま住みついているところは、北米では、おそらくここだけではないだろうか。

私はこの町を訪れて、もっと驚いたことがあった。八十歳をとくに越えた古老と話していたときであった。古老は私の姓を声を出して呼んでいるうち、「もしかすると、あなたは、あの……」と突然、語調が変わった。そしてめがねを外し、顔を私に接近させ、じっとみつめた。

「あなたのお父さんは、確かバンクーバーの仏教会で開教使をなさっていましたか。」

そう言われた瞬間、私は全身がひきしまる思いがした。急に汗がふき出してきた。古老は私の実父を知っていたのである。人里離れたこの町で、はじめてバンクーバーにいたときの父親を具体的に知る人に会おうとは、考えてもみなかった。

私の実父（多田寛哉）は、一九二〇年代から三〇年代にかけて、バンクーバーの日本人街にあった浄土真宗本願寺派系の仏教会で開教使をしていた。戦前に帰

国後、私が生まれ、私の幼いときに病死した。だから、父のカナダでの具体的な生活や仕事の内容については母親から断片的に聞かされてはいたものの、いつになっても実感として理解できなかった。

父の死後、約三十年経過して、カナダを旅行しているうち、ニューデンバーで偶然にも「カナダ時代」の父を知る古老と会ったのは不思議といえ全く不思議なめぐりあわせであった。

「わたしやねえ、あなたのお父さんの説教をいつも日曜日に仏教会へ出かけて行っては聞かしてもろうとたんじや。その息子さんにこんなところで会うなんて、人の出会いちゅうのは、ほんとにわからんもんよ……」

千葉県出身というこの古老は、父について知る限りのことを、遠い記憶をまさぐりながらしみじみと話してくれた。

ずんぐりした体つきの父が、説教壇に立つと、とたんにとてもない大きな声でしゃべり出し、マイクロホンが不要だったこと、説教の後半あたりになると、ついつい話に熱がこもり、ハンカチを取り出しては盛んにあふれる汗をぬぐうこと、時に古老を退屈させたこと……。

古老は一枚の黄ばんだ写真を探し出してきた。葬儀のスナップ写真だった。棺の後方に長い行列があり、棺のわきに洋装に袈裟姿で立っているのは、まぎれもなく父であった。家に残された写真で覚えていたのと同じ顔つきであった。しかつめらしく、こわいようで、どこことなく

威厳に満ちたその風貌を見つめていると、当時の父の存在と移民の生きざまといったものが身近かに迫ってくるような気がして、私はしばらく写真をにぎりしめたままであった。

あれから三年後の今春、アメリカ旅行からの帰り、サンフランシスコまで戻ったとき、なぜか、再びバンクーバーに行きたいという気持がもたげ、抑え切れなくなった。その目的は、仏教会を訪ね、父のことをもつと知ってみたいという思いを満足させるためだった。バンクーバーの中心街からやや東はずれにある旧日本人街。パウエル通りに面した仏教会は、ちやうど改築中であつた。仏壇、仏具書類など一切は、一ブロック下がったところで、入り口に「ジャパニーズ・ホール」



和歌山県日高郡美浜町三尾（通称アメリカ村）の「アメリカ村資料館」に展示されている日系カナダ移民の生活調度品。（読売新聞大阪本社提供）